

KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

NO.38

神田日勝記念美術館だより



神田日勝《馬（絶筆・未完）》1970年 油彩、ベニヤ板 183.0×204.0cm 当館蔵



神田日勝記念美術館館長

小林 潤

前年度の『なつぞら』フィーバーの余韻が残る昨年2月頃から新型コロナウイルス禍が世界を襲い、当館もご多分に漏れず大きな被害がもたらされました。当町の冬場の「然別湖コタン祭り」との新たな相互連携などがスタートした直後の時期でした。

幸い、前年から打ち合わせしていた俳優吉沢亮氏が語る日勝作品の音声ガイド収録は、かろうじて東京赤坂のスタジオで無事終えることができました。

4月には、かねてから念願の展示室壁面の全面改修が行われたまでは計画通りに進んだものの、その後は前述のコロナ禍で様々な事業が変更・中止を余儀なくされました。

NHK 連続テレビ小説『なつぞら』に関連した「夏空を翔けた馬たち」展の会期変更をはじめ、然別湖を舞台に活動する写真家の知来要と絵本作家の村上康成の「水と魚、魅惑の世界展」の次年度への開催延期。恒例の「蕪壑祭」・「馬耕忌」・「日勝祭」はことごとく中止に追い込まれました。同じく恒例の全国各地の小中学生対象の「馬の絵作品展」も、参加希

一年を振り返って

望者からの強い開催要望をいただきながらも、断腸の思いで断念しました。

そのようななか、没後50年「神田日勝 大地への筆触」巡回展は、数年前の企画段階からご指導、ご尽力いただいた東京ステーションギャラリーの富田館長様、北海道立近代美術館の佐藤前学芸副館長様、北海道新聞社様はじめ、関係する皆様の多大なご協力のもとに奇跡的に東京・鹿追・札幌ともに開催でき、多くのご来場をいただきました。前述の吉沢亮氏の音声ガイドも好評を博しました。

秋の「躍動する十勝の美術作家展」は十勝の作家で実行委員会を組んでいただき、新たな時代の初めての試みとして開催されましたが、前後期計57名の力作は訪れた4,700名を超える人々から高い評価をいただきました。

このように未曾有の感染症のパンデミックとの闘いの一年でしたが、今後も芸術文化の小さな拠点として、友の会の皆さんとさらなる着実な歩みを進める所存であり、変わらぬご指導を切に願っております。



神田日勝没後50年「躍動する十勝の美術作家展」を終えて

躍動する十勝の美術作家展実行委員会 事務局長

瀧川 秀敏

2020年（令和2年）9月11日から11月15日までの55日間、地元十勝に住む美術作家57名の作品が一堂に会する展覧会「躍動する十勝の美術作家展」が前期後期に分かれて開催されました。コロナ禍にありながら、神田日勝記念美術館の感染予防対策万全のもと、多くの方々のご来場により成功裏に終えることができましたことを心よりお礼申し上げます。

これもひとえにこの企画を提案くださった神田日勝記念美術館・神田日勝記念美術館展覧会事業実行委員会・神田日勝記念美術友会の会、および現場でご奮闘いただいた本展実行委員の皆様をはじめ、多くの方々のご尽力、ご協力、ご支援の賜物であります。また、作品の搬出入に関して出品者の負担を軽減してくださった神田日勝記念美術館の温かい心遣いにも重ねて感謝申し上げます。ありがとうございました。

思えば2019年（令和元年）8月に準備委員会が発足し、2020年（令和2年）コロナウィルスの収束のめどもつかない状況で、本当に開催できるのかと言う不安が募るなかでの進

行は複雑なものがあったことと思います。それだけに4746名ものの方々のご来場くださったことは、本当に達成の喜びもひとしおでございました。

また、神田日勝没後50年「神田日勝 大地への筆触」展の開催に引き続く「十勝の美術作家展」でしたので、北の大地十勝に根付く、たくましく生き抜いてきた十勝の美術文化の息遣いをより一層感じ取っていただけたのではないのでしょうか。

2017年より文化芸術基本法が改正され、「文化芸術は、人々の創造性をはぐくみ、その表現力を高めるとともに、人々の心のつながりや相互に理解し尊重し合う土壌を提供し、多様性を受け入れることができる心豊かな社会を形成するものであり、世界の平和に寄与するものである」として地方の芸術文化活動が、まちづくりにもつながるますます重要な位置に置かれました。今後もこのような積極的な文化芸術活動を進めていけますよう、これからも皆様のご支援ご協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。



小樽芸術村顧問／前北海道立近代美術館学芸副館長

佐藤 幸宏

没後50年 神田日勝展に寄せて

昨年は、神田日勝の没後50年にあたる記念すべき年でした。鹿追町の開町100年ともあいまって、これまでで最大級の回顧展が東京、鹿追、そして札幌で開かれました。この展覧会について、個人的な関わりを含め、執筆の機会を頂いたことに、まずは神田日勝記念美術館の皆様にお礼を申し上げたいと思います。

私が日勝展に関わることになったきっかけは、5年ほど前、同館の運営協議会委員に就任したことでした。当時、私は道立近代美術館の学芸副館長職に就いたばかりで、定年退職した前任者の残りの任期を引き継いだのでした。最初の協議会の時だったでしょうか。没後50年を迎える4年後の2020年に大きな展覧会を美術館が計画していることを知りました。迂闊にもそんなに大きな節目の年が近いことを意識していなかった私は、自分の不見識を恥じると同時に、道立近代美術館でも取り組むべき展覧会ではないかと思い始めました。

しかも驚いたことに、その展覧会を東京でも開催するという計画ではありませんか。日勝は北海道の学芸員なら誰でも知っている画家ですが、東京の美術館の学芸員が果たして関心を持ってくれるだろうか、大きな回顧展を開催してくれる美術館が本当にあるだろうか、と半信半疑だったのです（町民の皆様、すみません）。しかし、美術館ですすでに働きかけを始めていて、それが東京ステーションギャラリーと聞いてさらに驚きました。というのも、同館の館長である冨田章さんは、大学院時代、同じゼミで学んだ仲だったからです。そこで私は上京の機会を捉えて冨田さんに会いに行きました。

冨田さんは三つの美術館を渡り歩いた経験豊富な学芸員であり、同時に幅広い知識と柔軟な感性に恵まれた優秀な美術史研究者でもあります。彼なら日勝の展覧会を開催してくれるのではないだろうかと期待して再会に臨みました。しかし、彼は日勝の画業には大きな関心を寄せつつも、展覧会を開催することには躊躇しているように見えました。という

も、自館には日勝に関する知識を持つ学芸員がいないこと、そして東京と北海道の2ヶ所を巡回する大きな規模の展覧会を、当時は学芸員が一人しかいない（今は2名になりましたが）、日勝美術館と実際にやれるだろうかという不安、この2つの理由があったと思います。

そこで私は、その場で道立近代美術館も参加を検討する旨を伝えました。札幌に戻ってからまず館内で了承を得て、それからスポンサー探しに着手しました。3館を巡回する展覧会となれば、作品の輸送や展示の経費、図録やグッズの制作費、ポスター・チラシの制作や広告等を含む広報費など、数千万円規模の予算が必要になります。道立近代美術館は、展覧会予算に関しては、全国の数多い公立美術館の中でも下から数えたほうが早いくらい貧乏な館だったので、スポンサーなしでは展覧会に参加することは困難でした。

幸いにも北海道新聞社さんが理解を示してくれて、展覧会のマネージメント全体も引き受けてくれることになりました。それも日勝という画家が北海道の宝であるという認識が、新聞社の方々にも広く共有されていたからだと思います。もちろん、その当時はNHKの連続テレビ小説『なつぞら』で日勝が注目されることになるなど、予想もしていない時期でした。

この度の神田日勝展が実現できたのは、日勝の没後、半世紀近くも彼の画業の保存と普及に努めてきた町民の皆さんの理解と尽力の賜物だと私はいま確信しています。私がこの展覧会を通じて最も感銘を受けたのは、それが単なる一時的な町おこし運動の結果などではなく、郷土の文化を大切にしてきた町の長年に渡るたゆまぬ努力があって初めて成し得た奇跡だったことです。それがなければ、スポンサーの理解やドラマでのブレイクに繋がることはなかったと思います。地元の文化を保存し、後世に伝えることの大切さを、身をもって知った経験でした。

開催を中止した事業一覧

新型コロナウイルス感染拡大のため、以下の事業は開催を中止いたしました

- 5月 第1回アートキッズクラブ・「水と魚、魅惑の世界展 知来要十村上康成」※次年度に延期
- 6月 第26回 蕪壺祭
- 7月 「神田日勝 大地への筆触」ギャラリートーク（会期中全3回）・第2回 アートキッズクラブ
- 8月 第28回 馬耕忌・夏休み子どもワークショップ
- 9月 芸術鑑賞バスツアー・「躍動する十勝の美術作家展」ギャラリートーク
- 10月 第26回 馬の絵作品展・馬の絵作品展表彰式
- 12月 第18回 日勝祭・第3回 アートキッズクラブ
- 1月 冬休み子どもワークショップ
- 2月 絵画教室（隔週全4回）・第4回 アートキッズクラブ
- 3月 春休み子どもワークショップ

没後50年 鹿追町開町100年 「神田日勝 大地への筆触」



会期:2020年(令和2年)7月11日(土)～9月6日(日)

*前後期で展示替え有

●前期7月11日(土)～8月10日(月・祝) ●後期8月12日(水)～9月6日(日)

主催:神田日勝記念美術館 共催:北海道新聞社

後援:鹿追町、鹿追町教育委員会、神田日勝記念美術館友の会、十勝毎日新聞社、NHK帯広放送局、FM WING、FM-JAGA

出品作品数:前期63点、後期65点 入場者数:7,356名

開催趣旨

本展は、北海道を代表する画家のひとり、神田日勝(1937-1970)が2020年に没後50年を迎えるにあたり、その画業の全貌を回顧し、新たな位置づけを目指すものです。

神田日勝は、1937年に東京・練馬に生まれ、少年期に北海道十勝地方・鹿追に移住し、農業のかたわら独学で油彩画を制作しました。1956年から本格的な活動を始め、十勝の大地に生きる農耕馬などを題材に、全道展(全道美術協会展)や独立展(独立美術協会展)で次々に作品を発表しました。32歳で夭折したため、わずか10年あまりの画歴ですが、残された作品からは、当時の絵画潮流の影響を受けながら、さまざまな様式に挑んでいたことが窺えます。また、それらの作品にはいずれも画面いっぱいにペインティングナイフで刻みつけるような筆触が広がり、日勝にとって絵画を制作する行為そのものが、あたかも大地へ鋤を入れ耕作する営みと同等であったかのようにも感じさせます。

これまで「夭折の農民画家」という半ば伝説化されたイメージで語られることが多かった日勝ですが、近年の調査により、今まで知られていなかった同時代絵画との結びつきや制作プロセスが徐々に明らかになってきました。本展では、こうした調査による新たな視点もくわえて日勝の画業に迫り、従来のイメージに留まらない、その芸術の魅力を紹介します。

章構成(全7章)

- I章 プロローグ
- II章 壁と人
- III章 牛馬を見つめる
- IV章 画室/室内風景
- V章 アンフォルメルを試み
- VI章 十勝の風景
- VII章 エピローグー半身の馬



関連作家

曹良奎《密閉せる倉庫》(1957年 東京国立近代美術館蔵)
 // 《マンホールB》(1958年 宮城県美術館蔵)
 神田一明《赤い室内》(1961年 北海道立近代美術館蔵)
 寺島春雄《柵と人》(1957年 帯広百年記念館蔵)
 海老原春之助《友よさらば》(1951年 神奈川県立美術館蔵)
 // 《川辺にて》(1962年 神奈川県立美術館蔵)
 海老原暎《1969年3月30日》(1969年 作家蔵※)
 北川民次《画家の家族》(1969年 東京国立近代美術館蔵)
 ※巡回展終了後、神田日勝記念美術館に寄贈

巡回情報

■東京展

会期:2020年6月2日(火)～6月28日(日)

会場:東京ステーションギャラリー

主催:東京ステーションギャラリー
 (公益財団法人 東日本鉄道文化財団)
 協賛:柳月/特別協力:神田日勝記念美術館/
 企画協力:北海道新聞社、北海道立近代美術館

出品作品数75点 入場者数:10,535名



提供:東京ステーションギャラリー
 ©Hayato Wakabayashi

■札幌展

会期:2020年9月19日(土)～11月8日(日)

会場:北海道立近代美術館

主催:北海道立近代美術館、北海道新聞社
 後援:北海道、札幌市、札幌市教育委員会
 協力:神田日勝記念美術館/協賛:柳月

出品作品数:85点 入場者数:27,928名



展覧会グッズ再販のお知らせ



好評につき2021年4月からクリアファイルやマスキングテープ、額絵、手ぬぐい等のグッズを再販します。(在庫がなくなり次第終了)

展覧会図録販売中



『神田日勝 大地への筆触』展図録
 (A4版変形 196ページ)
 北海道新聞社 2020年
 2,750円(税込)
 当館受付および公式HPにて販売中

展覧会をふりかえって

このたびの没後50年記念巡回展は、日勝の主要作品を網羅的に紹介しつつ、近年のスクラップブックやデッサン帳、蔵書の調査分析によって知られることとなった日勝の同時代美術に対する積極的姿勢を踏まえ、彼のさまざまな絵画潮流に対する志向が多様な画風とその展開をもたらしたという視点から、神田日勝芸術の独創性をとくにその筆触に着目しつつ、再検討を試みるものでした。

本巡回展第二会場の鹿追展では、会場の広さと構造面の課題から、展示の際は全7章から成る構成を解体し、より展覧会のエッセンスに特化した展示方法でご覧いただきました。具体的には、展覧会のメインビジュアルを飾る《馬（絶筆・未完）》を中心に据え、前半のエリアでは最新の調査研究成果、すなわち同時代美術からの影響を関連作家との比較展示によって示し、後半のエリアではひと壁に並べられた代表作から、画風展開を辿りました。会期中盤では作品の入れ替えをおこない、通期で約75点の作品をご覧いただきました。

本巡回展の開催をきっかけに、新たな発見と今後さらなる調査や検討を要する課題が浮かび上がりました。ひとつは札幌展での「IV章 画室／室内風景」の展示から見えてきた、「画室」から「室内風景」へのモチーフの展開とその解釈について、もうひとつは《室内風景》の新聞の表現の元になった絵画、海老原暎《1969年3月30日》と日勝の接点についてです。

「手紙」から「新聞」へ

本巡回展の三会場のうち、道立近代美術館での札幌展には最多点数が並び、「画室」シリーズや「人と牛」シリーズに類される全作品が展示されました〔図1〕。

《画室A》（1966年）から《画室E》（1967年）までの5点から成る「画室」シリーズは、まだ自分専用のアトリエを持たなかった日勝が、ひとり制作に専念できる憧れの場所、理想の光景を描いたものと言えます。それを絵画化するにあたって、日勝は雑誌『みづゑ』に掲載された山口薫のアトリエ写真を参考にしました。

全5点のモチーフの変遷については別途あらためて検証されるべきですが（※1）、ここでは「手紙」と「新聞」という2つのモチーフとその繋がりに注目します。手紙は「画室」二作目の《画室B》（1966年）に描かれており、椅子の足元に葉書が、右端のスリッパの隣に封筒が確認できます〔図2〕。葉書の宛名には神田家住所と日勝の名らしき文字が書かれており、封筒の差出人も神田日勝と読めます（ただし封は破られています）。

これらの手紙は、この部屋の主人がひとり閉ざされた空間に居ながらも、外の世界と繋がっていることを示します。のちに《画室E》に登場する新聞もまた、社会と繋がるための文字通りの媒体（メディア）であり、没年の《室内風景》にいたっては、新聞が人物を取り囲む構図となることで、この役割が象徴的にあらわされています。これら「画室」の展開の中で、手紙は新聞に容容したと捉えられるかもしれません。

その後「画室」には人物がくわわって「室内風景」へと展開し、新聞は最終的に部屋を覆いつくす「壁」になります。先述の通り、新聞は画中の人物と社会を結ぶツールと解釈できますが、それと同時に、外から吹き入る風を塞ぐ「目張り」の役割をも担っていると考えられないでしょうか。つまり、この人物は、新聞によって社会の情勢や潮流を把握しようとしながら、他方では、自己の世界に閉じこもり、外から流れ込む情報を遮断していると見ることもできるでしょう。この相反するありさまに、作者である日勝自身が美術界に対して抱えていた羨望と葛藤を見出すことができ、だからこそ、いっそう画中の人物が日勝本人の姿に思えてくるのです。

《1969年3月30日》との出会い

本展では、海老原暎《1969年3月30日》を《室内風景》の新聞の表現に影響を与えた作品として、《室内風景》との関連によって紹介しました〔図3〕。

《1969年3月30日》については、画家の徳丸滋氏の証言によって、日勝が本作の作品図版を印刷物（『第9回現代日本美術展画集』と思われる）で眼にしていたことが明らかになっています（※2）。

この点について、東京展開幕後に作家の藤村克裕氏の教示により、海老原作品が発表された第9回現代日本美術展と、日勝が上京して観覧したという第8回独立選抜展が同時に東京都美術館で開催されており、現地で《1969年3月30日》を実見した可能性がきわめて高いことが新たにわかりました。

日勝が自作を出品した第8回独立選抜展は、1969年5月17日～23日に東京都美術館で開催されており、《1969年3月30日》が出品された第9回現代日本美術展は、同年5月10日～30日に同館で開催されました。日勝の東京滞在日程は不明ですが（夫人のミサ子氏も覚えが無いといいます）、少なくとも独立選抜展開催中は《1969年3月30日》が展示されていました。

このことを踏まえれば、《室内風景》にいたって初めてナイフを使わず絵筆で新聞を描き上げた理由についても、小さな作品図版ではなく、間近で実物の《1969年3月30日》を観察したことによって、その描法を学んで自作に取り入れた流れがよくわかります。徳丸氏が神田家を訪れた時点で、日勝は作品の実物を観ていたのでしょう。

その後、日勝の旧蔵品のなかに、東京帯広間の飛行機のダイヤが記載された新聞記事の切り抜きと航空会社発行の時刻表が見つかり、飛行機で上京したこともわかりました。往復運賃3万円は決して安くはない金額ですが、7歳での渡道以来はじめての帰郷で、さらにこれまで雑誌等の図版を通して見ていた世界にじかに触れられる千載一遇の機会となれば、一時間でも長く現地の空気に触れていたかったことと想像されます。この生涯一度きりの上京、数日間の滞在で彼が観たものや触れたものについて、さらなる綿密な調査と検討が必要です。（川岸）

※1) 2021年度特別企画展「画家たちの座標—アトリエは語る—」展で「画室」シリーズの展開を検証する(7/7～9/12)

※2) 菅訓章「取材ノート『室内風景をめぐる』」、『神田日勝記念美術館だより』第18号、2003年



図1



図2



図3

2020年度の展覧会

夏空を翔けた馬たち

会期:2020年(令和2年)5月26日(火)～7月5日(日)

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため当初の会期を変更して開催

主催:神田日勝記念美術館展覧会事業実行委員会

共催:神田日勝記念美術館、神田日勝記念美術館友の会

協力:十勝毎日新聞社、(一社)帯広観光コンベンション協会

後援:鹿追町、鹿追町教育委員会、NHK帯広放送局

入場者数:1,269名



NHK連続テレビ小説の記念すべき100作目となった『なつぞら』(2019年4月～9月放送)。戦後の十勝を舞台に、アニメーターを目指す主人公・奥原なつの半生を描いたこの作品では、彼女に絵心を教える青年・山田天陽が登場します。そのモチーフになったのが、十勝に生きた画家・神田日勝です。

神田日勝もまた、山田家と同じく東京から十勝へ疎開して来た開拓農家であり、農業のかたわら絵画制作を行い、数多くの馬の絵を残し、将来を嘱望されながら若くしてこの世を去りました。

本展では、ドラマに登場した天陽の作品から、なつが出演した演劇『白蛇伝説』の背景画として、ピカソの《ゲルニカ》をモチーフに描かれた作品や、天陽の展覧会初受賞作(第29回十勝美術展)となった馬の絵、絶筆となった馬の絵とともに、劇中で使用されたスケッチや小道具など計35点を展示しました。また、会場の一角に視聴コーナーを設け、名シーンを振り返りました。

見どころとなった作品は、ドラマ終盤に印象的に登場した天陽の「自画像」です。農具や作物、馬のデッサンなど、自らを象徴するようなモチーフに囲まれた「自画像」は、日勝の《室内風景》(1970年)を思わせます。本展出品作は劇中の作品とは別作品であり、このたび『なつぞら』の絵画制作を手がけた旭川市出身の画家・村山之都氏に新たに描き下ろしていただきました。

展示室2階には、日勝の風景画17点を展示し、日勝と天陽の「共演」をご覧いただきました。

神田日勝没後50年 躍動する十勝の美術作家展

会期:2020年(令和2年)9月11日(金)～11月15日(日)

※前後期で展示替

主催:神田日勝記念美術館

共催:神田日勝記念美術館展覧会事業実行委員会、

神田日勝記念美術館友の会

主管:躍動する十勝の美術作家展実行委員会

後援:鹿追町、鹿追町教育委員会、北海道新聞帯広支社、

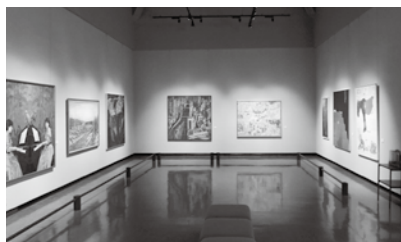
十勝毎日新聞社、NHK帯広放送局

入場者数:4,746名

神田日勝の画業は1956年、十勝の平原社美術協会展への初出品初入賞に始まります。その後、全道展や独立展に出品し、同世代の十勝の若手画家らとともに活動の幅を全国へ広げる一方、地元でも個展やグループ展を次々開催し、十勝画壇の発展に貢献しました。

本展は神田日勝没後50年を記念して、独自のリアリズムを追求し、十勝の美術活動の推進に奔走した神田日勝の志にちなみ、今日十勝で精力的に活動を展開する美術作家57名によるグループ展です。

会場には、油彩画や水彩画、鉛筆画、版画など全57点が前後期に分けて展示されたほか、展示室2階には特別展示コーナーを設け、日勝の風景画9点を展示しました。



出品作家(五十音順/敬称略)

◆前期 9月11日(金)～10月11日(日)

浅川茂、浅野公宏、飯森篤志、池原良徳、和泉よう子、梅津美香、おおとひでお、奥秋広美、井出宏子、今西直人、今西ちはる、金澤博子、鎌田朝緒、齊藤隆博、佐々木裕二、佐藤美和子、高田健治、高橋芳子、千葉定是、寺沢秀明、浜中マサノリ、宮澤克忠、村上陽一、森本憲司、山田洋子、由良真一、脇坂裕、和田仁智義 / 神田日勝(特別展示)

◆後期 10月13日(火)～11月15日(日)

穴井亜紀子、飯田和幸、池田緑、上田薫、大崎和男、小笠原洋子、神田絵里子、近藤みどり、斉藤啓子、匂坂敏郎、佐々木武信、さとうえみこ、佐藤真康、白土薫、高橋幸男、瀧川秀敏、田之島篤子、中西千尋、中村富志男、中谷有逸、東原こずえ、細木るみ子、松久充生、村上俊彦、森弘志、山平博子、山元明、吉川孝、渡邊禎祥 / 神田日勝(特別展示)

2020年度 コレクション展

会期:2020年(令和2年)11月19日(木)～2021年(令和3年)5月23日(日)

入場者数:1,264名(3月31日時点)



神田日勝展のみどころ

■2020年8月4日(火) 10:00~11:00
 ■ウリマックホール(鹿追町役場瓜幕支所) ■瓜幕寿会 34名

神田日勝を学ぼう(総合的な学習の時間)

■2020年9月17日(木) 13:15~14:00
 ■鹿追町立鹿追小学校 ■小学3年生 41名

今一度、神田日勝を学ぼう

■2020年10月22日(木) 10:00~11:30
 ■笹川寿の家 ■笹川老人クラブ 18名

美術館&アートへの招待(子どもの心に響く道徳教育推進事業)

■2020年11月12日(木) 10:40~12:20
 ■土幌町立土幌小学校 ■小学4年生 33名、6年生37名

実習等 受け入れ実績

職場体験 2020年10月23日(金)
 受け入れ人数:3名(鹿追町立鹿追中学校2年生)

博物館実習 2021年2月2日(火)~4日(木)、9日(火)、10日(水)
 受け入れ人数:1名(帯広大谷短期大学2年生)

テレビ番組

BS日テレ【ぶらぶら美術・博物館】

●「回顧展『神田日勝 大地への筆触』〜朝ドラ『なつぞら』山田天陽のモデル! 北海道・十勝が生んだ画家〜」
 ●2020年5月26日(火) 20:00~20:54放送

Eテレ(NHK教育テレビ)【日曜美術館】

●「そばにいつも絵があった 妻が語る画家・神田日勝」 ●2020年10月11日(日) 9:00~9:45放送

美術雑誌

池上 英洋 神田日勝 試行し続けた`農民画家、

『芸術新潮』 2020年6月号(第71巻6号/通巻846号) 編集・発行:新潮社 発行日:2020年6月25日

中野 中 多彩と混迷の危うい活況〜1975年前後

『美術の窓』2020年9月号(第39巻第9号/通巻444号) 編集・発行:生活の友社 発行日:2020年9月20日

新聞記事

河 正雄

韓日リアリズム作家の軌跡 在日一世の画家・青良奎と北海道で活躍した神田日勝

『東洋経済日報』 発行日:2020年8月14日

感想ノートより

初めての入館でした。32才でなくなれたのは本当に残念です。彼が生きていれば、どんなすごい絵を描いたのでしょうか。しかし32才で燃え尽きてもいい作品を残したとも言えるかも。いずれにしても、絵の迫力に感動しました。

2020.7.17(金) 大阪 吹田 K.

記念館は3回目です。子どもの時、馬との生活の毎日でした。ここに来ると当時を思い出します。本当に優しい目で馬を見、描いています。絶筆になった馬の目は、何を訴えているのでしょうか。何回見ても、何か強く訴えられている感じがします。苦しい生活の中で、力強く生きることを訴えているのでしょうか。

2020.7.17(金) 音更町 O.T

未完の馬を見たくて茨城よりやってきました。以前たまたま見たこの絵に見入られてしまった事を覚えています。日勝さんの絵は心に残ります。本当にすばらしい絵を残して下さいありがとうございます。

2020.7.26(日) 茨城県 K.K

去年亡くなった父と、幼い頃に観た日勝さんの絵を、感慨深い想いで観ていました。私も、小さい時に北鹿追に住んでいた、その頃(50年前)の風景や社会、生活が思い起こされました。日勝さんの作品からは、昔からの大事なものが表現されていると思います。感動をありがとうございます。

2020.8.9(日)

義父 道展会員。今は、鬼籍に入っておりますが、絵のタッチがとても似ており、同じ郷里の人でもあり、強く影響を受けたと、確信致しました。維持されるのは、大変ですが、守って下さいませ。よろしく願いいたします。

2020.8.15(土) K.M

父が鹿追町出身で、当時日勝さんは浮いた存在だったと聞きました。しかし、時代が変われば評価され、信念を曲げず絵を書き続けた日勝さんはとてもカッコいいと思いました。神田日勝記念美術館がずっと残り次の世代の方たちまで日勝さんの作品が見られることを祈っています。

2020.9.2(水) H

幼少の時に母につれられて札幌の北海道近代美術

館で室内風景を観ました。子供の頃は…なぜかきたなくてこわいとしか感じられませんでした。そして年を重ねて51歳になり、現在開催中の北海道近代美術館で神田日勝展を観てその才能、素晴らしさを感じました。そして本日、鹿追町の美術館に来ました。鹿追町の風景を観てあらためて作家への思いをはせ短い苦難の人生の中、偉業をなして下さりありがとうございますと、神田日勝氏に感謝します。日勝氏と入れ替わりに誕生した私達夫婦も(夫1971生 妻1969生)これからがんばって生きていこうと思いました。

2020.11.3(火・祝)

SNSより

東京ステーションギャラリー「神田日勝」。神田の作品がこれほど変化に富むとは知らなかった。多くの画家に影響を受け自身の絵画を模索した未完の画業。家族同然の馬が死んだとき描いた《死馬》が印象深い。眠るように身を横たえる馬の毛並みは執拗に描き込まれ、生命感さえ感じさせるツヤを放つ。

2020.6.2(火)

東京ステーションギャラリー『神田日勝 大地への筆触』よかった…もちろん牛馬の絵も圧巻だけど、石壁やブリキ缶の静物の鋭さ・柔らかさ・重さ…ペインティングナイフを使った繊細で力強いマチュールは絶対に現物を見た方が感動が大きいはず。久しぶりの美術館で、鮮烈な生々しさに打ちのめされた。

2020.6.6(土)

東京ステーションギャラリーの「神田日勝 大地への筆触」展へ。時間予約制でゆったりと作品を観ることができた。途中、ポップアートに振り切れている時期があって驚いたものの、やはり馬や飯場の人間を描いたものがよかった。症的に農民男性の足が大きく描かれていたのが印象的。

2020.6.14(日)

神田日勝が、展覧会になかなか入選しないことで絵の方向性に悩み苦しんでいたことを東京ステーションギャラリーの特別展で知った。個人的には、有名な作品だけでなく、同展に出品されていた鹿追の風景を描いた小品がたまらなくて、身体を気づかって長生きしてほしいなあと心底思った。

2020.6.26(金)

#神田日勝 #大地への筆触 後期を見た。アンフォルメルを試み、晴れた日の風景を描く日勝を想像した。風景画は晩秋から春先まで農閑期が多い。当たり前。百姓は春から刈り取りまでが忙しい。鹿追の雪原、閉ざされた中、アトリエにこもって光と暑熱を求め、太陽を描く狂気を想像すると圧倒された。

2020.8.19(水)

神田日勝の作品展へ。没後50年の節目に企画されたこの作品展は、普段この美術館でも収蔵していない作品も各地より集められていて、見応えがありました。作品ごとにタッチも表現したい事象もガラリと変わり、作家の作品を一つだけ見てわかった気になってはいけないんだな、と思いました。

2020.9.5(土)

道立近代美術館で開催されている神田日勝展を観て来ました。コロナのせいで見たかった展覧会が中止になっていた、やっと観た本物は迫力が違います。

原点から昇華、そして原点への回帰の半ば。決して長くは無い作者の人生への筆圧が、夢大きながらも儚くも哀しい時代を感じます。

2020.9.24(木)

道近美の神田日勝展、行ってきた。壁や板や錆びた金属の感触が感じられるほど緻密な描写。茶褐色の壁を描いた作品も、色彩を取り入れて室内を描いた作品も、息が詰まるような圧迫感があった…もちろん良い意味で! チラシの画像では気づかなかったけど、馬は毛が細かく一本一本描かれていたんだね。

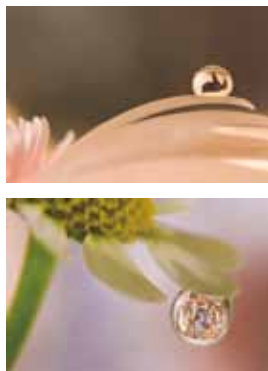
2020.10.1(木)

今日近代美術館で観た神田日勝、15年くらいしか活動期間がなかったみたいなんだけど、白い瘦馬を入口付近で観てから他の画家、ポップアートとかに影響を受けた作品を経由して、出口付近の絶筆の馬のカラフルに燃える体毛を観る流れが最高すぎて、かなり勇気を貰った、最終日だったんだよね。

2020.11.8(日)

※ノートにお名前を記載いただいている場合はイニシャルで表記しました ※SNSアカウント名は省略しました ※誤表記と思われる語句も原文に忠実に表記しました

新収蔵品紹介(寄贈作品)



浅井美紀

《作品1(半身の馬)》2018年 タイプCプリント 45.7×56.0cm

《作品6(飯場の風景)》2018年 タイプCプリント 100.0×150.0cm ほか18点



吉田傑《半身の馬》2019年

ダンボール 200.0×165.0×210.0cm



神田日勝《風景》1965年頃
油彩、ベニヤ板 16.3×22.3cm



海老原映《1969年3月30日》
1969年

油彩、キャンバス 162.0×130.0cm

子ども芸術鑑賞ツアー

実施日:2020年8月23日(日)

行先:福原記念美術館(鹿追町)・神田日勝記念美術館(鹿追町) /参加者数:5名

今年は福原記念美術館と神田日勝記念美術館の2館を巡りました。福原記念美術館は、スーパー福原の創業者・福原治平氏のコレクションを常設しています。吉田傑さんのダンボール・アートや、神田絵里子さん(神田日勝長女)の作品を中心に鑑賞しました。神田日勝記念美術館では、開催中の没後50年「神田日勝 大地への筆触」展を謎解きクイズを交えながら鑑賞しました。



NEWS

吉沢亮さんによる 音声ガイドが完成しました!

今年度から、吉沢亮さんがナレーションをつとめる音声ガイドの運用がはじまりました。都内スタジオでのナレーション収録は6時間にも及びましたが、ナレーターに徹する吉沢さんの顔つきは、テレビで見る華やい俳優の顔とは別人にも感じられ、仕事に對峙するプロの姿勢が垣間見られました。完成した音声ガイドは、2020年春からの没後50年「神田日勝 大地への筆触」で東京ステーションギャラリーを皮切りに、当館、札幌の北海道立近代美術館でも、多くの来場者に利用されました。現在は当館で館蔵品の音声ガイドとして活躍しています。真剣勝負で挑んでいただいた吉沢亮さんに、心からの労いと感謝の言葉を捧げ、末永く大切に使用させていただきます!



ロビー上映映像を リニューアルしました!

1993年の開館以来、当館ロビーで上映していた神田日勝の紹介用映像を27年ぶりにリニューアルしました。映像ひとつひとつが格段に鮮明になり、内容的にもよりコンパクトにまとめられていますので、ぜひご鑑賞の前後にご覧ください。

『神田日勝 大地に生き、描く』

上映時間:約9分

製作:株式会社HBCフレックス

神田日勝ともう一度会う 松崎霜樹(本映像ナレーター)

師走のある日、勤務先のおびひろ市民ラジオに札幌の映像制作会社から電話がかかってきた。同じ業界ではあるが、こちらは音声、あちらは映像が専門で一緒に仕事をすることはあまりない。

「前に神田日勝のナレーションされていますよね」

「あ、ええ、確かに…随分昔ですが」

「ああ良かった。やっぱりそうでしたか」
嬉しそうに話すその方は同社のプロデューサーで、実は20数年ぶりに神田日勝記念美術館にあるロビー映像を作

り直すことになり、かつてと同じナレーターを再起用しようと私に連絡してきたのだ。美術館開館時に作ったとすると驚いたことに28年前だ。

わたしは現在、帯広の小さなラジオ局で働いているがその昔はTVやラジオコマーシャル等の職業ナレーターだった時代がある。道内各地にある博物館や資料館の映像紹介ビデオなども随分経験した。

ある種のご縁を感じて依頼には快諾の返事をして電話を終えた。ラジオでは今も現役だが実は少し不安がよぎった。「若い時代の自分と果たして同じレベルで仕事できるかな」「今の自分に日勝の強い情熱に立ち向かえるかな」等々…。ご縁、というのはかつて公職で鹿追町には幾度も訪ねていたこと。鹿追町の観光の取材等でしょっちゅうお世話になっていること。そしてなによりも去年から十勝に移住してきたことである。そんなわけで農業と表現のはざまで葛藤した神田日勝ともう一度向き合うこととなり、1月中旬収録は無事終えた。日勝に少しは近づけたかな。

(現おびひろ市民ラジオスーパーバイザー
兼プロデューサー)